



北軽井沢交差点の近くに北軽井沢ミュージックホールがあります。このホールは小澤征爾氏等、桐朋学園関係の夏季研修の会場でした。100人収容できる半野外的なホールですが、長野原町に寄贈され、群馬交響楽団とも関係を持ち、ここで毎夏コンサートが開催されています。今年も、クラリネット奏者のナイディック夫妻を中心とした演奏会がありましたので、それを楽しみにしておりました。

今回のプログラムは、誰も知らないであろう F. Blasius (1758-1829) の作品が最後に演奏され、それに流れ込むようにプログラムが作られていますという説明がありました。Blasius はフランス人指揮者、クラリネット奏者で、当時流行していたオペラの「良いとこ取り」をして、木管六重奏による組曲を作曲したそうです。シューマン(ピアノとホルン)、プーランク(クラリネット2本)、ベートーヴェンやモーツァルト(クラリネット、ファゴットとホルンの六重奏曲)の曲は前座ということになりました。作曲者の若い頃の作品とか、意気だった作品であるとの解説もされました。最後の Blasius の曲は挑戦的な様々な工夫がちりばめられた、しかもユーモアたっぷりの作品で、時々、笑わずにはいられないほどでした。ホルン奏者のパーヴィース氏が曲に合わせて手拍子をするよう私たちに促されました。ともかく楽しい作品でした。何にも増して、演奏者と聴衆が同じフロアにいます。私とナイディック氏との距離は2mでしたが、楽譜を眺めながら演奏を聞いたのです。そればかりか、楽器を吹くすべての身体機能を目の当たりにしながら、息遣い、情感、リズムを感じ、文字通り、一体感を味わいながらのコンサートでした。



実はこの日の前に、旧軽井沢にある大賀ホールでも演奏会があり、チケットをいただいていた。なんと幸運な！五角形のホールで、去年は金子三勇士氏のピアノを聞いて、ワクワクしたことを懐かしく思い出しました。

プログラムは盛りだくさんでした。14歳になったばかりのピアニスト奥井紫麻氏は第1回クライネフ・モスクワ国際ピアノコンクールジュニア部門最年少第一位。ショパンを滑らかに演奏しました。落ち着いて、堂々としていました。本当に素晴らしかったです。

第2部はソプラノ、ヴァイオリン、ピアノのトリオ・コンサートでした。3人が個別に、また、組んで、賑やかなプログラムを演奏してくれました。曲目は馴染みのものが多く、聞きながら、一緒に弾んでしまいそうでした。

ソプラノ小林沙羅氏は日本歌曲、カンツォーネ、オペラなど、レパートリーは多岐に渡ります。喜歌劇のアリア“私の唇は熱いキスをする”では、フロアまで降りて、情熱的に歌い踊りながら会場を回り、驚きました。ソプラノはやはり舞台の花なのでしょう。

ヴァイオリン松田理奈氏は数々のコンクールで第一位や受賞の経歴のある実力派。ブラジル音楽“ティコティコ”や、“チャルダッシュ”では生き生きとした演奏で聴衆を魅了しました。ヴァイオリンは感情や思いの流れに添って、切なく、甘く、自由に羽ばたくようで、うっとりせずにはいられません。

ピアノ中野翔太氏はジュリアード音楽院出身で、逸材と感じました。ショパンのノクターン、ピアソラのリベルタンゴ、ガーシュウインのラプソディ・イン・ブルーなど、多彩な曲目や音色を自在な演奏で、豊かに演奏してくれました。また、すべての曲目を、伴奏されましたが、それも見事でした。

若い演奏家が、皆、猛練習の成果であるはずなのに、華やかに、優雅に、美しい時間を創ってくださったと思わずにはいられません。夏の日、静かな、爽やかな自然の中で、豊かで、楽しい時間を過ごすことが出来て嬉しい限りでした。